

大菅向台遺跡第2地点

－中世、屋敷地の景観－

上席調査研究員 渋谷 健 司

遺跡の立地と周辺の遺跡

大菅向台遺跡第2地点は、尾羽根川によって開析された標高35mの舌状台地上に所在する。昭和63年に調査された南側部分では、奈良・平安時代の集落跡などが確認されている。その他にも、後醍醐天皇の側近でこの地に流された藤原師賢（1301～1332年）の墓とされる大納言塚のある小御門神社や、本遺跡と同一台地上に存在し建武2年（1335年）の板碑が存在する檀林寺、838年創建とされる龍正院、大須賀氏一族の居城である助崎城跡などが所在する。

遺跡の概要

調査は、平成22年5月から同年11月にかけて実施した。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡23軒、中世火葬土坑15基・地下式坑8基、近世地下式坑12基、その他に台地整形区画4ヶ所、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑等、多数の遺構を確認している。出土した遺物は、奈良・平安時代の土師器・須恵器、中世～近世の土師質土器・陶磁器・茶臼・銭貨・獣骨等である。

奈良・平安時代の集落跡

4号竪穴住居跡は、調査区西側の台地縁辺部より確認された。この竪穴住居跡は、斜面地にあり一部消滅しているものの、台地平坦面のものに比べ良好な状態で検出している。規模は、一辺2.5m、深さ0.45mと小型で、カマドの右脇より須恵器杯や土師器杯・鉢等が出土している。竪穴住居跡の時期は、新治産の須恵器杯などの出土遺物より奈良時代前半のものと考えられる。本遺跡のある台地は、中世及び近世の台地整形区画により削平され、古代の遺構の多くが消滅し遺存状態も良くないが、当時は大規模な集落が台地全体に展開していたと考えられる。

中世と近世の遺構

中世の遺構としては、4ヶ所の墓域と調査区東側の台地整形区画内に存在する掘立柱建物跡ほか、調査区中央に集中して地下式坑等が検出されている。近世の遺構としては、調査区西側より集中して地下式坑等が確認された。以下、中世と近世の遺構について触れたいと思う。

①地下式坑

本遺跡からは、中世と近世の地下式坑を確認したが、その特徴は中世のものは竪坑（入口）と主室が一体となった作りになっているのに対し、近世のものは竪坑と主室が基本的に独立し、トンネルなどで接続している点である。使用目的について中世は、収納施設や葬送施設など諸説あり、まだ不明な点が多いが、近世については農作物等の保存用のムロなどとして使用されたのではないかと考えられている。6号地下式坑（近世）は、全長4.7m、主室の幅は1.7m、深さ1mを測る。2号地下式坑（近世）は特殊で、ステップ状になっている竪坑より、二つの主室に入る構造で、またその奥にある主室にはトンネルで接続している。地下式坑の分布状況は、中世（21号地下式坑など）では調査区中央部にやや集中して展開するが、それに対して近世では調査区西側の台地整形区画内で扇状に展開する特徴が見られる。

②4ヶ所の墓域（火葬土坑・土坑墓）

火葬土坑は4ヶ所ある墓域のいずれからも確認され、これに隣接して出土遺物が少ないが墓と考えられる方形の土坑を検出した。95号土坑は全長2.5m、最大幅1.1m、深さ0.6mの火葬土坑である。その構造は、火葬施設本体である燃焼坑とその下から空気が送られる通気溝、空気を通す通気孔、人が空気を

送る吸気坑からなっている。遺物は燃焼坑よりムシロ状の炭化材、骨片及び北宋銭が出土している。4ヶ所ある墓域の中で、調査区東側の台地整形区画に近い墓域C・Dは、地下式坑が複数付随する点や、出土遺物が他の墓域に比べて充実し、また地山を削って作られたと思われる築山状の土堤（どてい）が隣接することから、墓域A・Bと異なる性格があると思われる。本遺跡と同じく墓域を複数持つ遺跡では、核となる墓があるとされ、この2ヶ所の墓域C・Dがその役割を担っているのではないだろうか。

③調査区東側の台地整形区画及びその周辺

台地整形区画は、排水施設と考えられる溝状遺構等の状況から、二回にわたって拡張が行なわれたと思われる。その最大の規模は、長さが約50m、幅約20mで、周囲との高低差は最大約1mを測り、大規模な造成が行われている。その廃土は、台地整形区画内の整地に使われ、また南東側斜面地に捨てることで平坦面を広げようとしたと考えられる。拡張した方向は、地形的な制約もあるが、南東側斜面地に対し平行に伸びている。南東側斜面地に捨てられた廃土からは、常滑産甕や、内耳土鍋等の生活雑器が主に出土している。

台地整形区画内からは、大規模な総柱の掘立柱建物跡と想定される遺構を確認した。その想定される最大の規模は、長軸約13m、短軸約8mで、建物面積はほぼ100㎡を測る。この建物跡は台地整形区画内の北東側に寄って構築され、増築もしくは改築をしており、敷地もそれに伴って拡張し、結果的に大規模なものになっている。この建物跡内に位置する228号土坑からは、当初灯明皿として使用していたカワラケが置かれるような状態で完全な形のまま出土している。カワラケは儀式の時の飲食に使われたとされ、主が^{あるじ}住む建物跡より大量に出土する。また、建物の地鎮の時にのお供え物を入れる容器としても使用されている。本遺跡の場合は儀式での使用でなく、地鎮の出土状況に近いが、お供え物と容器の蓋が確認できなかった。以上のことは、地鎮行為を理解しないまでも、その行為をしようとした意図の現れと思われ、遺物からも総柱の掘立柱建物跡の重要性を

窺うことができる。

この大規模な建物跡の北側には、やや大型の130号土坑がある。その規模は、長さ3.6m、幅3.8m、深さ0.9mで台地整形区画と同じ方向に主軸を持ち、出入り口と考えられる張り出し部分がある。他の遺跡の調査では、作業小屋あるいは収納庫とする説がある。同土坑と重複関係にある128号土坑からは、瀬戸産平碗（15世紀前半）などが出土している。また、隣接し形が似た129号土坑の底面からは、柱を設置したのではないかと考えられる浅い掘り込みがあり、上屋の存在が推測される。

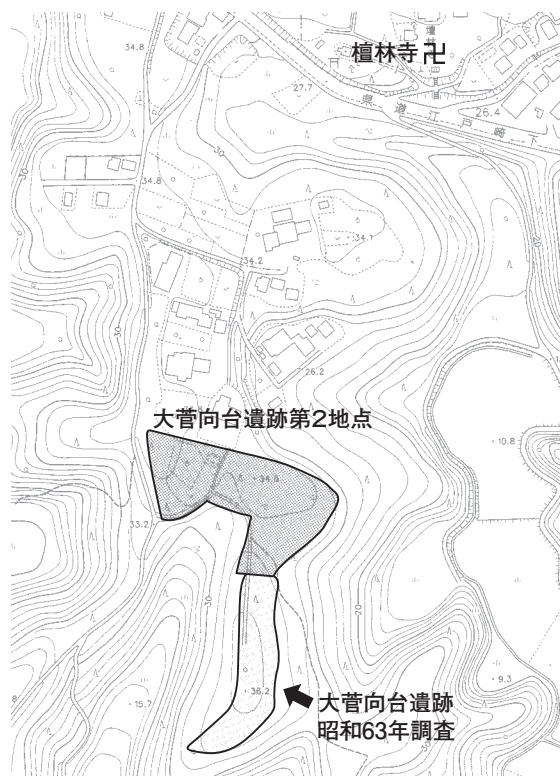
台地整形区画の北側からは、112号土坑を確認した。長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.5mと小規模だが、安山岩製の茶臼の上臼がほぼ完形で出土している。この茶臼は直径19cm、高さ10cm、重さ6kgで、挽き手を差し込む穴は側面に対面で2ヶ所あり、その周囲には菱形の文様が施される。当時の茶臼は武士や僧侶など有力者にしか手に入らないものであった。その茶臼が出土した112号土坑は、大規模な建物跡と墓域Cの間に位置している。このことは墓域Cが他の墓域よりも優位性があることを表していると思われる。

まとめ

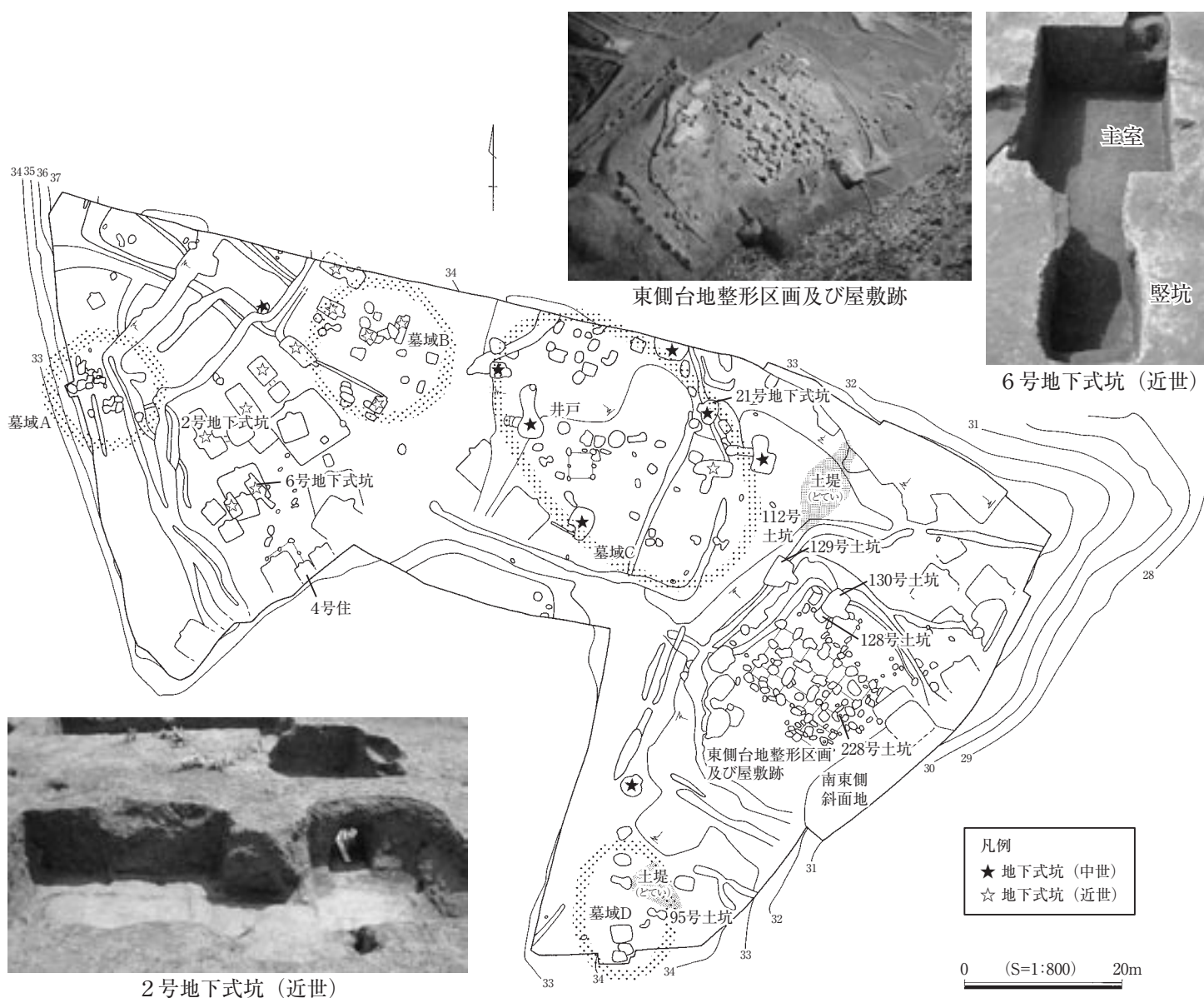
以上、整理作業前のため、極一部の出土遺物からの判断であるが、本遺跡の中世の遺構は、15世紀を中心としており、この期間で地下式坑を付随させながら土坑墓、そして新たに出現した火葬土坑からなる墓域が形成されたと思われる。15世紀には、造墓階層の拡大により墓の大衆化が急速に展開する時期とされ、このような流れの中で、地縁的なつながりによる集団墓地が形成され则认为られている。本遺跡においても複数の墓域が形成されたのは、この時期と考えられる。今のところ積極的に供養堂に伴う仏教的な遺物が認められないことや、在地領主層の居館のように敷地の周囲に堀が巡らないことなどから、本遺跡の大規模な建物跡や複数の墓域は、名主のような上層農民層の屋敷跡及び集団墓ではないかと考えられる。



第1図 周辺の遺跡 (S=1:50,000)



第2図 地形図 (S=1:5,000)



2号地下式坑 (近世)

第3図 遺構配置図



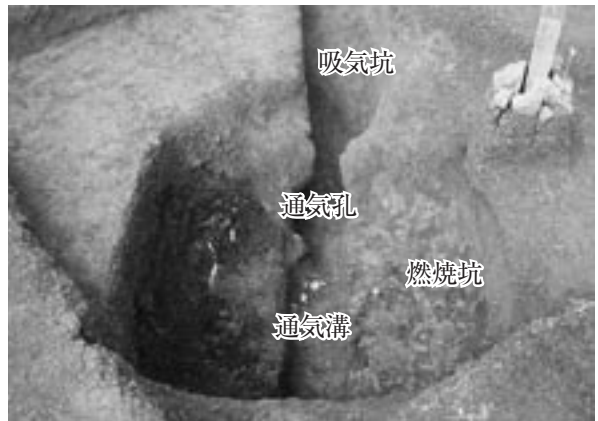
大菅向台遺跡第2地点空撮



4号竖穴住居跡遺物出土状況（奈良時代）



21号地下式坑（以下、中世）



95号土坑遺物出土状況（人骨・銭貨他）



128・130号土坑



128号土坑遺物出土状況（平碗）



112号土坑遺物出土状況（茶臼）



228号土坑遺物出土状況（カワラケ）